

京都大学図書館蔵「長恨歌并琵琶行」の訓点

宇都宮 陸 男

一、はじめに

京都大学図書館蔵（船橋家旧蔵）「長恨歌并琵琶行」は、その奥書に、次のようである。

天文十二年八月十五日十六日 於万里小路亭講之長恨歌 翠軒宗尤

即ち、天文十二年（一五四三）、清原宣賢（環翠軒）は号、宗尤は法名）が書写したものである。

本書は、所謂「抄物」の一つで、本文は八行、カナ抄は二行割、十六行である。本文には、ヲコト点、片仮名、声点その他の補助符号および朱引が見られる。

本調査では、抄の部分は除外して、本文に付された、これらの訓点に限って取り上げることにする。テキストは、国田百合子氏編「長恨歌・琵琶行抄」（武蔵野書院）によった。

二、京都大学図書館蔵本の訓点についての問題点

京都大学図書館蔵本の訓点についての問題点として、次の二つのことを考えてみたい。

(A) 京都大学図書館蔵本（以下「京本」と略称）と阪本龍門文庫

本「長恨歌并琵琶行」（以下「阪本」と略称）との訓点の類同性についての論証。

(B) 京本の訓点と阪本の訓点との相違する点について、その事実の指摘とその意味することについての考察。

まず、(A)の問題点を明らかにするために、京本の訓点を、「他本」「他本」とは、天理図書館蔵仲恩筆室町期写本以下「天本」と略称V、内閣文庫蔵天正五年写本以下「内本」と略称Vおよび三条西家蔵正安二年写本以下「三本」と略称Vをさしている。天本と内本は前述の国田氏編に掲載のもの、三本は岩波書店刊「文学」第二巻第六號に掲載のものである。の訓点と比較して、京本の独自の訓点を抽出し、それを阪本の当該箇所との訓点と比較して、京本の独自の訓点と京本の独自の訓点は殆ど全て阪本の訓点と一致していることがわかる。そこで、それらを次のように、八種に分類して、それぞれ比較検討してみることにする。（用例は京本のもので、挙例は、二〜三例ずつに止める。）

(1) 京本・阪本と他本とで訓読方法が相違するもの（用例の後の

カッコ内の数字は京本の頁数。以下同）

① 説書 心中 無限 事 (191)

阪本「無限」、天本「無限」、内本「無限」。

京本と阪本は「無限」と音読みもせず、天本のように返読もせず、直接「ソコバク」と訓読するのは、意訳的訓読方法として古訓法にかなっている。

② 就中ヨリナカニ泣ナク下シタ誰最多タレモキ (201)

阪本「就中」、天本「就中」、内本「就中」。

この例も①の例に準じて考えることができる。

(2) 京本・阪本に訓点があるのに、他本には訓点がないもの。

① 中有ナニ二人ニ字ヲ玉真ヲ (176)

阪本「字」、天本・内本「字」、三本「名」。

② 猶抱イタイテ琵琶ハ半遮ハサシカケ一面セ (190)

阪本「抱」、天本「抱」、内本「抱」。

③ 六宮リツノ粉黛コノ無顔色シ (150)

阪本「六宮」、天本「六宮」、内本「六宮」、三本「六宮」。

挙例は三例に止めるが、右のように、京本と阪本の訓点の共通性と、且つ他本との相違が明らかになると思う。

(3) 京本・阪本に読み添え語があるのに、他本にはないもの。

(コト) ① 嘔吐ウウツ咽嘶オウツツ難シ爲シ爲シ聽ク (199)

阪本「爲」、天本・内本「爲」。

(アリ) ① 絃オモヒ抑ア鞞オモヒ鞞オモヒ (191)

阪本「思」、天本・内本「思」。

(ス) ① 水泉ミヅ冷澁シ絃シ凝シ絶ス (193)

阪本「凝絶」、天本「凝絶」、内本「凝絶」。

(タマフ) ① 御オノ玉タマ多タ年ネン求ム不レ得ズ (149)

阪本「得」、天本・内本「得」、三本「得」。

(リ) ① 十三トウ學マナブ得ズ琵琶ハ成ル (195)

阪本「成」、天本「成」、内本「成」。

(タリ) ① 妝ヨソ成ル每ヘ被レ秋アキ娘メ妬ム (195)

阪本「被」、天本「被」、内本「被」。

(ツ) ① 説トキ盡ツク心中シノ無レ限リ事ト (191)

阪本「説盡」、天本「説盡」、内本「説盡」。

(ス) ① 水泉ミヅ冷澁シ絃シ凝シ絶ス (193)

阪本「凝絶」、天本「凝絶」、内本「凝絶」。

(ン) ① 爲レ君ノ翻ヒ作ス琵琶ハ行ク (200)

阪本「作」、天本・内本「作」。

この例だけは、例外的に、天本・内本に推量助動詞「ン」があるのに、京本・阪本には見られない。

(ニ) ① 初ハジメ爲シ寛ク裳ヲ後ノ六ムム (191)

阪本「後」、天本「復」、内本「後」。

(テ) ① 低ヒ肩カ信シ手テ (191)

阪本「低」、天本「低」、内本「低」。

〔シテ〕① 七月七日 長生殿 (182)

阪本「長生殿」、天本・内本「長生殿」、三本「長生殿」。

〔ハ〕① 後宮の佳麗 三千人 (185)

阪本「佳麗」、天本「佳麗」、内本「佳麗」、三本「佳麗」。

以上のように、京本・阪本には共通して、読み添え語が見られるのに対して、他本には、これが見られない場合が多く（「ソ」の例外を除く）、この点からも、京本・阪本の共通性と、それらは多分、古訓法に基づくものであるうと思われる。

(4) 京本・阪本が終止形に訓読しているのに、他本は中止形に訓読しているもの。

① 天長 地久 有^レ時 盡 (183)

阪本「盡」、天本・内本「盡」、三本「盡」。

② 感^{シテ}我 此^{コト}言 良久 立 (200)

阪本「立」、天本「立」、内本「立」。

右の天本「立」の「シテ」は読めない訓であるが、抄の部分に「久^{シテ}」とあって、即ち「久（しく）シテ」と訓んでいるから、この「シテ」は「久」字に送るべきを誤って、「立」字に付したものと考える。そうすると、「立」は中止形ではないことになる。

③ 大絃 嘈^{サウ}々 如^ニ急^{ムラサキ}雨 (192)

阪本「如」、天本「如」、内本「如」。

これは、例外的に、京本・阪本が中止形で、他本が終止形である。(5) 京本・阪本の訓点は、係り結びの法則に合致しているのに、他本はそれに反するもの。

① 就^{ツツ}中 泣^{ナク}下 誰^{タレ}最^{モト}多 (201)

阪本「最多」、天本「多」、内本「多」。

(6) 京本・阪本と他本とで、和訓に相違があるもの。

① 侍^シ見^ミ 扶^フ起^キ 嬌^{セウ} 無^ム力^{リキ} (193)

阪本「侍見」、天本「侍見」、内本「侍見」、三本「侍見」。

天本の左訓「ヲモイヒト」は「ヲモトヒト」の誤写である。

② 緩^{ユル}一^{イツ}歌^カ 慢^{マン} 舞^{マユ} 凝^{ユル}三^{サン}絲^シ竹^{チク} (156)

阪本「慢」、天本「慢」、内本「慢」、三本「慢」。

③ 曲^{マク}終^{シュウ} 抽^{ヒキ} 撥^{ハク} 當^{マウ}心^{シン} 畫^{ガク} (193)

阪本「抽」、天本・内本「抽」。

この「抽」字に対して「オサム」「オサフ」の訓は、類聚名義抄（観智院本）にも登録されていない。所が、純国訳漢文大成本（汪立名編訂「白香山詩集」を底本とする）や明曆三年（一六五七）板本の本文では「收」となっている。このような本文を持つ古写本も存在していて、その訓の「オサム・オサフ」が本文の相違にもかかわらず、踏襲されたのではないかと思う。名義抄には「收」に「ヲサム」の訓がある。

④ 夜深 忽^{ツキ}夢^{ユメ}三^{サン}少^{ショウ}年^{ネン}事^{コト} (197)

阪本「深」^{フカテ}、天本「深」^{シナ}、内本「深」^テ。

京本・阪本は動詞「フク」に訓読し、天本は形容詞「フカシ」に訓読している。

⑤ 相逢 何必 曾 相識 (198)

阪本「曾」^{ムカシヨリ}、天本「曾」^テ、内本「曾」。

「カッテ」は本来、下に否定語を伴って、「全く、全然、すべて」などの意味を表わすものであったのが、平安後期あたりから、「以前に、さきに。あるとき」などの意味を派生したらしい。従って、ここで「カッテ」と訓読せず、「ムカシヨリ」と訓読する京本・阪本は古訓法に従ったものといえるが、天本などは平安後期以後の新しい訓読に従っていることになる。

⑥ 嘔吐 唖嘶 難 聽 (199)

阪本「聽」^{キ、ト}、天本「聽」^{キ、ト}、内本「聽」^{キ、ト}。

「キ、」は「キク」の連用形「キ、」の転姓名詞であろう。天本・内本の「キクコトヲ」に対して、やゝ奇異な訓であるが、京本・阪本に共通して見られる訓である。

(7) 京本・阪本は訓読みしている所を、他本では音読みしているもの。

① 忽聞海上 有 仙 山 (176)

阪本「海」^{ノホトリニ}上、天本「海」^{ノホトリニ}上、内本「海」^{ノホトリニ}上、三本

「海上」。

② 雲鬢 半 偏 (178)

阪本「雲」^{ノヒツ}鬢、天本「雲」^{ノヒツ}鬢、内本「雲」^{ノヒツ}鬢、三本「雲」

鬢^{ミツラ}」

三条西家本は訓読みであって、古訓を伝えるものと思われる。

③ 低眉 信手 續々 彈 (191)

阪本「続」^{ツキク}々、天本「續」^{ツキク}々、内本「續」^{ツキク}々。

④ 住 近 滄江 地 低 濕 (199)

阪本「住」^{スムコトハ}、天本「住」^{スムコトハ}、内本「住」。

阪本「低」^{スモコトハ}濕、天本「低」^{スモコトハ}濕、内本「低」^{スモコトハ}濕。

「低」^{スモコトハ}濕」の場合は、例外的に、京本・阪本が音読みで、天本が訓読みであるが、それにしても、天本の返り点と付訓とでは、読み下しが不可能である。

⑤ 天 旋 地 轉 回 龍 駁 (166)

阪本「轉」^{マク}、天本「轉」^{マク}、内本「轉」^{マク}、三本「轉」^{マク}。

この例のような例外も稀にはあるが、総体的にいつて、京本・阪本で訓読みのものが、他本では多く、音読みになっていて、京本・阪本の古訓性を表わしている。

(8) 京本・阪本と他本とでは、字音の音形が相違する場合。

① 其 中 綽 約 多 仙 子 (176)

阪本「綽」^{シヤク}約、天本「綽」^{シヤク}約、内本「綽」^{シヤク}約、三本

「綽」^{シヤク}約。

現行の漢和辞典には、漢吳音ともに、「綽」^{シヤク}とあって、「タク」や「ニヤク」の音形は見られない。「タク」は旁からの所謂百姓読みで、「ニヤク」は「シ」と「ニ」との仮名字体類似による誤写とい

うことも考えられる。京本・阪本は共に正しく、「シヤク」とある。所で、「紐約」の意味は、「ゆつたりとしてしとやかなさま。」(学研漢和大字典)とあるから、状態を表わす語で、天本や三本のように、形容動詞として訓読するのが正しいと思われるが、京本・阪本は共に、動詞として訓読している。しかし、「シヤクヤク(ト)シテ」と「ト」を脱したもののようにも思われるが、訓点の形の上からは「ト」を入れるスペースはなく、連続している。すると、このまま動詞として訓読したと認めるべきかとも思われる。

⑤ 間一閑 カンクワンクワンタル 鶯語 カカラヒは 花底滑 ハナソコナメラカサ (192)

阪本「間一閑」、天本「間一閑」、内本「間一閑」。

「間」字は、漢音「カン」、呉音「ケン」である。従って、京本・阪本は漢音読みに従い、天本は呉音読みに従っていることになる。「間一閑」とは、ここでは「のどかにさえずる鳥の声の形容」(学研漢和大字典)である。

⑥ 名 ナ 屬 ニ 教 ニ 坊 ニ 第一 ノ 部 ノ (195)

阪本「第・部」、天本「第・部」、内本「第・部」。

「第」は、漢音「テイ」、呉音「ダイ」。「部」は、漢音「ホウ・ホ」、呉音「ブ」。従って、京本・阪本は漢音で共通し、これに對して、天本は呉音読みである。

⑦ 弟一走 フタトドテ 從軍 ヒイタクサニ 阿一姨 アヒ 死 シ (196)

阪本「阿」、天本・内本「阿」。

「阿」は漢音・呉音ともに「ア」で、「アツ」の音形は見られない。この特殊な音形が京本・阪本に共通するのである。「阿姨」は、

「おば(母の姉妹)を親しんでいうことば」(学研大辞典)である。「阿」は「親しみの気持ちをあらわして、人を呼ぶことばにつく接頭辞」(同大字典)である。

⑧ 前月 サキ 浮一梁 フウリヤウ 買一茶 カヒ 去 サカス (197)

阪本「浮」、天本「浮」、内本「浮」。

「浮」は呉音「フ」、漢音「フウ」、慣用音「フ」である。従って、京本・阪本は漢音に従い、天本は慣用音に従っていることになる。「浮梁」は地名である。

⑨ 嘔一啞 ウヱア 啞一啞 ウヱア 難 ナカシ 爲 レ 聽 キ (199)

阪本「嘶」、天本「嘶」、内本「嘶」。

「嘶」は漢音「タツ」、呉音「テチ」。従って、天本は漢音に一致するが、京本・阪本は漢音・呉音のいずれにも一致しない特殊な音形である。そして、この特殊な音形で、両者は共通しているのである。「啞一啞・啞一啞」は「鳥のさえずる声をあらわす擬声語。びいちく。」(学研漢和大字典)である。

以上、京本・阪本は、大凡、漢音であるか、さもなくば、漢音、呉音でもない特殊な音形であって、その点でも両者の訓点は一致し、他本と対立しているのである。

以上、(1)から(8)までの分類、举例とその説明とによって、以下のような二つの点が明らかになる。

(I) 京本・阪本の訓点は、他本のそれに比べて、非常に一致度が高く、恐らく同類又は同一系統の訓と考えられる。

(II) 京本・阪本の訓点は、他本のそれに比べて、訓読方法や訓の

語形などが、より古い訓法に一致する場合が多く見られる。それは、他本が雑僧などの、より後代的な訓法に依っているとと思われるのに對して、京本・阪本の方は、博士家訓例えば菅原家訓などを土台にしているからではないかと思われる。

次に、(B)の問題点を考えてみたい。(A)の問題の考察によつて、京本と阪本との訓点の類同性は、大体、明らかにされたことと思つた。所が、一方、子細にみると、京本と阪本とで、訓点の相違するものが見られる。

そこで次には、この訓点の相違するものについて、その事実の指摘と、それが意味する所を考えてみたい。この点を考えることによつて、京本・阪本の訓点の夫々の特色が、より明らかになると思つからである。

京本と阪本との訓点の相違には、次の三つの場合がある。即ち、(1) 京本・阪本ともに訓点は一一致するが、一方の訓点は完全な語形を持つ、所謂「完全訓」であるの對して、他方の訓点は、頭部、中部又は末部を省略した、不完全な、所謂「部分訓」であるという場合。

(2) 京本・阪本の、いずれか一方に訓点が存在するのに對して、他方には、それに対応する訓点が見られない場合。

(3) 京本と阪本との訓点で、相互に違いの見える場合。

さて、(1)の場合について、まず、京本が「完全訓」で、阪本が「部分訓」の場合から見えていくことにする。

(a) 京本の訓点の頭部を、阪本が省略したもの(74例)。

- | | | | | |
|---|--|--|-------|--------|
| ① | 初 <small>シメテヒトナレリ</small> | 長 <small>ナガ</small> 成 <small>ナリ</small> | (149) | 阪本「初」 |
| ② | 一 <small>ヒト</small> 朝 <small>アサ</small> 選 <small>ハレテ</small> | 選 <small>ハレテ</small> | (150) | 阪本「選」 |
| ③ | 嬌 <small>ワコト</small> 侍 <small>サマ</small> 夜 <small>ヨ</small> | 嬌 <small>ワコト</small> 侍 <small>サマ</small> 夜 <small>ヨ</small> | (155) | 阪本「嬌」 |
| ④ | 凝 <small>コウ</small> 二 <small>ニ</small> 絲 <small>イト</small> 竹 <small>タケ</small> | 凝 <small>コウ</small> 二 <small>ニ</small> 絲 <small>イト</small> 竹 <small>タケ</small> | (156) | 阪本「凝」 |
| ⑤ | 風 <small>カゼ</small> 肅 <small>ソク</small> 索 <small>ソク</small> | 風 <small>カゼ</small> 肅 <small>ソク</small> 索 <small>ソク</small> | (162) | 阪本「肅索」 |
- (b) 京本の訓点の中部を、阪本が省略したもの(12例)。
- | | | | | |
|---|---|---|-------|-------|
| ① | 漢 <small>マン</small> 皇 <small>クワン</small> 重 <small>オモシ</small> 色 <small>シキ</small> | 漢 <small>マン</small> 皇 <small>クワン</small> 重 <small>オモシ</small> 色 <small>シキ</small> | (149) | 阪本「重」 |
| ② | 養 <small>ヤウ</small> 在 <small>イニ</small> 深 <small>フカ</small> 閑 <small>ヒラ</small> | 養 <small>ヤウ</small> 在 <small>イニ</small> 深 <small>フカ</small> 閑 <small>ヒラ</small> | (149) | 阪本「養」 |
| ③ | 回 <small>クワ</small> 頭 <small>カウ</small> 一 <small>ヒト</small> 笑 <small>エウ</small> | 回 <small>クワ</small> 頭 <small>カウ</small> 一 <small>ヒト</small> 笑 <small>エウ</small> | (150) | 阪本「回」 |
| ④ | 温 <small>オン</small> 泉 <small>セン</small> 水 <small>スイ</small> 滑 <small>カハ</small> | 温 <small>オン</small> 泉 <small>セン</small> 水 <small>スイ</small> 滑 <small>カハ</small> | (152) | 阪本「滑」 |
| ⑤ | 君 <small>キミ</small> 臣 <small>シ</small> 相 <small>カヘ</small> 顧 <small>リト</small> | 君 <small>キミ</small> 臣 <small>シ</small> 相 <small>カヘ</small> 顧 <small>リト</small> | (167) | 阪本「顧」 |
- (c) 京本の訓点の末部を、阪本が省略したもの(6例)
- | | | | | |
|---|--|--|-------|---------|
| ① | 楊 <small>ヤウ</small> 家 <small>カ</small> 有 <small>アリ</small> 女 <small>メ</small> | 楊 <small>ヤウ</small> 家 <small>カ</small> 有 <small>アリ</small> 女 <small>メ</small> | (149) | 阪本「女」 |
| ① | 雲 <small>ウン</small> 棧 <small>ケン</small> 禁 <small>キン</small> 一 <small>ヒト</small> 紆 <small>コ</small> | 雲 <small>ウン</small> 棧 <small>ケン</small> 禁 <small>キン</small> 一 <small>ヒト</small> 紆 <small>コ</small> | (162) | 阪本「禁一紆」 |
| ② | 孤 <small>コ</small> 燈 <small>トウ</small> 挑 <small>チウ</small> 一 <small>ヒト</small> 盡 <small>ジン</small> | 孤 <small>コ</small> 燈 <small>トウ</small> 挑 <small>チウ</small> 一 <small>ヒト</small> 盡 <small>ジン</small> | (172) | 阪本「挑一盡」 |
| ① | 氷 <small>ヒョウ</small> 一 <small>ヒト</small> 下 <small>カ</small> | 氷 <small>ヒョウ</small> 一 <small>ヒト</small> 下 <small>カ</small> | (193) | 阪本「氷一」 |
| ① | 沈 <small>シン</small> 一 <small>ヒト</small> 吟 <small>イン</small> 收 <small>シュウ</small> 撥 <small>ハツ</small> | 沈 <small>シン</small> 一 <small>ヒト</small> 吟 <small>イン</small> 收 <small>シュウ</small> 撥 <small>ハツ</small> | (194) | 阪本「沈吟」 |
- (ル) (活用語尾の一部)
- | | | | | |
|---|--|--|-------|-----------|
| ① | 別 <small>ル</small> 時 <small>トキ</small> | 別 <small>ル</small> 時 <small>トキ</small> | (189) | 阪本「々(別)時」 |
|---|--|--|-------|-----------|

次に、右とは逆に、阪本が「完全訓」で、京本が「部分訓」の場合について、見ていくことにする。

(a) 阪本の訓点の頭部を、京本が省略したもの(12例)

① 夜[△] 専[△] 夜[△] 夜[△] (155) 阪本「夜、夜、夜」

② 令[△] 天[△] 下[△] 父[△] 母[△] 心[△] (156) 阪本「令」

③ 不[△] 能[△] 去[△] (167) 阪本「去」

④ 對[△] 此[△] 如[△] 何[△] (169) 阪本「此」

⑤ 我[△] 聞[△] 琵琶[△] (198) 阪本「我」

(b) 阪本の訓点の中部を、京本が省略したもの(1例)

① 爭[△] (195) 阪本「經」

(c) 阪本の訓点の末部が、京本に見られないもの(16例)

〔テ〕① 玉[△] 樓[△] 宴[△] 罷[△] (155) 阪本「宴」

京本の「テ」が落ちてゐるのは、ヲコト点「テ」を付け落したものである。

〔三〕① 蝦[△] 蟄[△] 陵[△] 下[△] (194) 阪本「下」

〔ハ〕① 第[△] 一[△] 走[△] 從[△] 軍[△] (196) 阪本「第」

〔ノ〕① 前[△] 一[△] 月[△] 浮[△] 一[△] 梁[△] (197) 阪本「前」

〔ガ〕① 如[△] 裂[△] 裂[△] 帛[△] (194) 阪本「如」

〔ヲ〕① 風[△] 吹[△] 三[△] 仙[△] 袂[△] (179) 阪本「仙」

〔コト〕① 排[△] 風[△] 駭[△] 氣[△] (175) 阪本「駭」

〔コレ〕① 本[△] 是[△] 京[△] 城[△] 女[△] (194) 阪本「本」

次に、(2)の場合について、まず、京本に訓点があるのに対して、阪本には、それに対応する訓点が見られないものから述べる。

(a) 京本の訓点、阪本に記載されていないだけで、実際には、京本と同一の訓読をしたと思われるもの。

(イ) 自立語の場合(28例)

① 多[△] 年[△] 求[△] 不[△] 得[△] (149) 阪本「得」

② 人[△] 未[△] 識[△] (149) 阪本「未」

③ 天[△] 生[△] 麗[△] 質[△] (149) 阪本「麗」

④ 難[△] 自[△] 棄[△] (150) 阪本「棄」

⑤ 嬌[△] 無[△] 力[△] (153) 阪本「力」

(ロ) 助詞の場合(7例)

〔ハ〕① 君[△] 王[△] 不[△] 早[△] 朝[△] (154) 阪本「君」

〔ノ〕① 鴛[△] 鴦[△] 瓦[△] 冷[△] (173) 阪本「鴛」

〔ヲ〕① 滿[△] 座[△] 聞[△] 之[△] (201) 阪本「之」

〔トシテ〕① 玉[△] 容[△] 寂[△] 寞[△] (179) 阪本「寂」

(b) 京本の音読符号が、阪本にないもの(5例)

① 霓[△] 裳[△] 羽[△] 衣[△] 曲[△] (157) 阪本「曲」

② 花[△] 鈿[△] 委[△] 地[△] (161) 阪本「地」

③ 京[△] 城[△] 女[△] (194) 阪本「女」

(c) 京本の音合符が、阪本にないもの(3例)

① 侍[△] 兒[△] 扶[△] 起[△] (153) 阪本「侍」

② 雲鬢カホハセ 花顏カホハセ (154) 阪本「花顏」

③ 顔色カホハセ 故コト (196) 阪本「顔色」

(b) 京本にだけ見られて、阪本には見られないし、且つ、実際に、そのように訓読もされなかった訓 (7例)

① 春寒ハルノサムイ 賜浴ミヤク (151) 阪本「春寒」

② 春宵ハルノヨ 苦短クタン (154) 阪本「苦短」

③ 不重生ハナハシ 生ナマ 男ヲ (156) 阪本「生」

④ 其中ナカニ 締約シヤクヤク (176) 阪本「締約」

⑤ 聞道キクミチ 漢家カンカ 天子テンシ 使シ (177) 阪本「聞道」

⑥ 含情クワンジヤウ 凝睇ネイテイ (179) 阪本「凝睇」

⑦ 悄悄セウシヤウ 無言ムゲン (194) 阪本「悄悄」

この(d)の例で注目されることは、阪本に見られない訓点は、③を除いて全て、京本の左訓ばかりであるということである。この京本の左訓の中には、一部假名字体や書体の線質から見て、宣賢点とは別筆で、後補されたものも交っているように見受けられる(⑥「ナカシメニシテ」は別筆と見られる)。この阪本の訓点は、京本の左訓と一致せず、右訓と一致しているのである。

次に、同じ(2)の場合ではあるが、右とは逆に、阪本に訓点がある

のに対して、京本には、それに対応する訓点が見られないものについて述べる。

(a) 阪本の訓点が、京本に記載されていないだけで、実際には、阪本と同一の訓読をしたと思われるもの。

(イ) 自立語の場合 (10例)

① 在イニ 君キミ 主ヌシ 側カタハラニ (150) 阪本「在」

② 百餘ヒヤクヨ 里リ (159) 阪本「百」

③ 行ユク 宮ミヤ 見ミ 月ツキ (163) 阪本「行」

④ 不フ 曾ソウ 来キ 入イ 夢ユメ (174) 阪本「入」

⑤ 釵シ 留ト 一ヒト 股コ (180) 阪本「股」

(ロ) 助詞の場合 (40例)

① 百ヒヤク 媚メヒ 生ナマ (150) 阪本「百媚」

② 金カネ 步フミ 插シヤク (154) 阪本「金」

③ 蜀シヤク 江カヘ 水ミヅ 碧ヒラキ (163) 阪本「蜀」

(三) (9例)

① 遂スエ 合アヒ 天アメ 下カ 父チチ 母ハハ 心ココロ (156) 阪本「遂」

② 南ミナミ 苑エン 多タ 三サン 秋アキ 草クサ (169) 阪本「南苑」

③ 夢ユメ 啼ナゲル 粧シヤウ 一ヒト 淚ナミダ (197) 阪本「夢」

(ヲ) (2例)

- ① 教[△]方[△]士[△] 啓[△]勳[△] (175) 阪本「方[△]士[△]・教[△]」
- ② 抱[△] 瑤[△] 蕚[△] (190) 阪本「瑤[△]・蕚[△]」
- 「テ・シテ」(2例)

- ① 昇[△] 天[△] 入[△] 地[△] (175) 阪本「入[△]」
- ② cf「ヲ」の①
- (b) 阪本の音読符号が、京本にないもの
用例ナシ

(c) 阪本の音合符が、京本にないもの (14例)

- ① 蝦[△] 蟄[△] 陵[△] 下[△] (194) 阪本「蝦[△]蟄[△]陵[△]」
- ② 潯[△] 陽[△] 江[△] (188) 阪本「潯[△]陽[△]江[△]」
- ③ 昭[△] 陽[△] 殿[△] 裏[△] (179) 阪本「昭[△]陽[△]殿[△]」
- ④ 太[△] 液[△] 芙[△] 蓉[△] (168) 阪本「太[△]液[△]」
- ⑤ 君[△] 臣[△] 相[△] 顧[△] (167) 阪本「君[△]臣[△]」

(d) 阪本にだけ見られて、京本には見られないし、且つ実際に、
そのように訓読もされなかった訓 (1例)

- ① 曾[△] 相[△] 識[△] (198) 阪本「相[△]識[△]」

(c) 阪本の訓合符が京本にないもの (13例)

- ① 春[△] 從[△] 春[△] 遊[△] (155) 阪本「春[△]遊[△]」
- ② 少[△] 人[△] 行[△] (162) 阪本「人[△]行[△]」
- ③ 日[△] 色[△] 薄[△] (163) 阪本「日[△]色[△]」
- ④ 其[△] 中[△] 綽[△] 約[△] (176) 阪本「其[△]中[△]」

- ⑤ 幽[△] 咽[△] 泉[△] 流[△] (192) 阪本「泉[△]流[△]」

(f) 阪本の訓読符号が、京本にないもの (2例)

- ① 傷[△] 心[△] 色[△] (163) 阪本「色[△]」
- 「色[△]」に対する訓「イロ」がないかわりに訓読符号を付して
いる。

- ② 無[△] 限[△] 事[△] (191) 阪本「事[△]」
- 「事[△]」に対する訓「コト」がないかわりに訓読符号を付して
いる。

(g) 阪本の声点 (濁声点) が、京本にないもの (3例)

- ① 翠[△] 翹[△] 金[△] 雀[△] (161) 阪本「翠[△]翹[△]」
- ② 峨[△] 嶂[△] 山[△] 下[△] (162) 阪本「峨[△]嶂[△]山[△]」
- ③ 門[△] 前[△] 冷[△] 落[△] (196) 阪本「門[△]前[△]」

次に、(3)の場合、即ち、京本と阪本との訓点で、相互に違いの見
られる場合について調べる。これには、次のように、(a)から(c)の場
合がある。

(a) 仮名遣いに相違あるもの

- ① 鶯[△] 鶯[△] 瓦[△] 冷[△] (173) 阪本「冷[△]」
- 京本はウ音便を、ウ表記しているのに、阪本はフ表記である。
〔フ—ユ〕

① 恩愛 絶タユ (179) 阪本「絶」

京本の仮名遣いが正しい。阪本は「タウ」「絶」と発音したもののフ表記かと思う。

〔ワーハ〕

① 奔ハシヘ 如シ電イナヒカリ (175) 阪本「奔」

京本の仮名遣いが正しい。阪本の「ワシル」は慈恩伝七承徳点にも例があるという(新潮国語辞典)。

〔イーヒ〕

① 天子の使ツカヒナリ (177) 阪本「使」

京本の仮名遣いが正しい。

〔ヘーヒ〕

① 詞中 有ナカヒ 誓チカヒ (182) 阪本「誓」

「チカフ」は八行四段活用だから、その転性名詞は、「チカヒ」のはずである。「チカヘ」はその音変化形か。

以上は、京本の仮名遣いが正しい場合であるが、次には、これと逆に、阪本の仮名遣いが正しい場合を記す。

〔ヒーイ〕

① 今夜 聞コト君カ 誓カ 語ゴト (200) 阪本「今夜」

侍サモト 兒ヒト 扶カ 起キ (183) 阪本「起」

② 霜ハナ 華ハナ 重ワモン (173) 阪本「重」

これも、阪本が正しく、京本が誤り。但し、定家仮名遣いに

従うと、京本の「ヲモシ」となる。

③ 摺カイトリ 衣ヲシ 推ス 枕マクラ (178) 阪本「推」

これも阪本が正しく、京本の誤り。但し、定家仮名遣いに従うと、京本「ヲシテ」になる。

④ 主人 下ヲ 馬ヨリ (188) 阪本「下」

これも阪本が正しい。定家仮名遣いでも阪本「オリ」が正しい。

以上、仮名遣いについては、契沖仮名遣いについても、定家仮名遣いについても、京本・阪本ともに誤りが見られ、一方だけが正しいということはない。

(b) 音変化(転音)による相違

① 可シ 隣ナリ 光ミツ 彩イロ (156) 阪本「隣」

築島氏の「平安時代の漢文訓読語につきての研究」によると、「アハレブ」は和文に用いられることが少く、漢文訓読系の語であるらしい。すると、京本は訓読語「アハレブ」を、阪本は和文語「アハレム」を用いていることになる。

② 盡ヒキ 日ヒ 君キミ 王ミコ (157) 阪本「盡」

「ヒメモス」は「ヒネモス」の「ネ」の後統子音_mへの逆行同化現象による転音形とみられるから、後出の形である。新潮国語辞典によると、「ヒネモス」の例は、万葉集に見られ、「ヒメモス」の例は、白氏文集四嘉禎(一二三五—三八)点に例がある。従って、京本の「ヒネモス」は、阪本の「ヒメモス」より古い形を示していることになる。

(c) 誤写による相違

① 幽咽ユウエン 泉流センリウ (192) 阪本「咽エツタル」

「咽」は呉音「エチ」、漢音「エツ」であって、「エフ」の音はない。恐らく、阪本は「エツ」の「ツ」を字体類似によって、「エフ」と誤写したものかと思う。

(d) 活用形の相違

① 莫モク 辭ジ 更シ 坐サ 彈タン 一曲イツク (200) 阪本「莫モク」

京本が形容詞「ナシ」の命令形に訓読しているのに対して、阪本は終止形に訓読している。他本すべて「ナカレ」と訓読しているのに、阪本だけが特殊である。或いは、字体類似によって、「レ」を「シ」に誤写したものかとも考えられるが、一応、このまゝ「シ」と訓んでおく。

(c) 語種の相違によるもの

① 取テ 酒シウ 還エン 獨ドク 傾ケイ (199) 阪本「傾カケテタリ」

京本は、完了助動詞「リ」がついたものとする、「リ」は四段動詞命令形・サ変動詞未然形につくのを原則としているから「傾ク」(下二段活用他動詞)につくのは不審である。しかし、平安末期以降には、他にも例があるようで、例えば、

○大臣・公卿キョウキョウ及ビ百官、皆、様々ニ仕ヘリ。(今昔一・二)

○一様の明月に兩はじめて晴れり(謡曲・羽衣) (杉崎一雄「国語法概説」III p)

のようである。そこで、本例も、これに類するものと見るか、又は、「傾ク」(四段活用自動詞)の已然形についたものとみるかのいず

れかである。文意からすると、前者と見るのが妥当であろう。これに対して、阪本は完了助動詞「タリ」を取っているのである。

② 聖セイ 主シュ 朝アサ 暮ユフ 情セイ (163) 阪本「朝アサ々ニラナク暮ユフ々ニラナク」

京本の「アサマ」は「朝間(夜明け、早朝、朝の間)」「ユフマ」は「夕間(夕方、夕暮の間)」の意である。阪本の「アサナ」「ユウナ」の「ナ」は接尾語で、毎朝、毎夕の意である。文意からは、阪本の方が適当なようにも思われるが、一概にはいえない。ちなみに、天本「アサナク」、内本「アサマク」である。なお、阪本「アサナ」「ユフナ」の「ナ」は「ア(ま)」ともたれなくはない字体であって、それならば、京本同様に、「アサマ」「ユフマ」となるのである。

以上、(1)(2)(3)の場合の用例数に従って、度数表を作ると、次のようになる。

訓分部と訓全完 (1)				京本	阪本	合計
小計	(c) 末部省略	(b) 中部省略	(a) 頭部省略			
29	16	1	12			
92	6	12	74			
121	22	13	86			

訓に互相 (3)			合場るれら見の点訓けだに方一 (2)								
(c) 誤写	(b) 音変化	(a) 仮名遣いの正しいもの	小計	(g) 声点	(f) 訓読符	(e) 訓合符	(d) 語一方だけの	(c) 音合符	(b) 音読符	(a) (イ) 助詞	(a) (イ) 自立語
0	アハレブ・ヒネモス 1 1	5	50	0	0	0	7	3	5	7	28
1	アハレム・ヒメモス 1 1	2	83	3	2	13	1	14	0	40	10
1	4	7	133	3	2	13	8	17	5	47	38

合計	合場るな異が点					
	小計	◎ 語種の相違		(d) 活用形の違		
91	12	ユフマ 1	アサマ 1	セシ 1	カクフケリ 1	莫レ 1
185	10	ユフナ 1	アサナ 1	セ 1	カタフケ 1	莫シ 1
276	22			8		2

右の表から明らかにすることは、次のような点である。

(1) 完全訓と部分訓の項では、阪本の方には、完全訓の(a)頭部省略、(b)中部省略が多く、一方、京本には、完全訓の(c)末部省略が多いということがある。そして、その末部とは、「テ・ニ・ハ・ノ・ガ・ヲ・コト・コレ」など、殆ど全て、京本のヲコト点で表わされる助詞などであって、もし、京本にヲコト点付きの親本があったとすると、そのヲコト点を、移点するに当って書き漏らしたものかもしれない。

次に、(2)の一方にだけ訓点の見られる場合については、京本に多いのは、(a)自立語、(b)音読符、(d)一方だけの語であり、一方、阪本に多いのは、(a)助詞、(c)音合符、(e)訓合符、(f)訓読符、(g)声点である。

京本に、(a)自立語が多いのは、(1)の(a)(b)の頭部・中部の完全訓が多いこと、揆を一にしている。これに対して、一方、阪本に(a)回

「助詞」が多いのは、(1)の(2)の訓の末部が多いこと、捺を一にして
いる。

これをまとめれば、京本は、本文文字に対する「振り仮名部
分」に優勢であり、阪本は、本文文字に対する「送り仮名部分」に
優勢であるということになる。

所が、(b)「音読符」が京本に多いのに対して、同一性質の(f)「訓
読符」は、逆に阪本に多い。従って、この(b)(f)からは特徴らしきも
のを見出すことが出来ないが、一方、(c)音合符、(e)訓合符、(g)声点
が、阪本に多いことは、京本の訓の「振り仮名部分」を、阪本が省
略した結果、その代償として音読するか、訓読するかを符号によっ
て表わした場合もあつたと思われる。

次に、(3)の相互に訓点異なる場合については、(a)「仮名遣い」
は、京本が正しく、阪本が誤っているものは五例、反対に、阪本が
正しく、京本が誤っているものは二例であつて、阪本の方が、やゝ
乱れが多い。(b)「音変化」の京本の「ヒネモス」の訓は、阪本の
「ヒメモス」より古形であり、(c)「誤写」も、用例のように、阪本
に見られ、又、(d)は一応、「活用形」の違いに分類してみたけれど
も、文意からすると、京本のように、「莫レ」と訓読する方がよい。
阪本の「莫シ」は「莫レ」の誤写ともみられて、(e)の「誤写」に属
するものかもしれない。

以上、(1)から(3)の場合の京本と阪本の訓点の種々な相違点を比較
すると、阪本の訓点が直接、京本から出たということにはならない
と思うけれども、もし、仮りに、京本と阪本の共通の親本（菅原家
のヲコト点付訓点本など）を想定することが出来るとするならば、

京本の訓点の方が、親本の原形を、より多く伝えているのではない
かと思われる。

三、おわりに

以上、二、の京都大学図書館蔵の訓点についての問題点の項にお
いて、(A)京本と阪本との訓点、(B)京本と阪本との訓点の相違する部分に
ついては、京本の訓点の方が、古く、且つ正しい形を持つ場合が多
いことから、もし、京本と阪本との共通の親本を想定することが出
来るならば、京本の方が、阪本よりも、親本の訓点の姿を、忠実に
反映することが多からうと推定した。しかし、この推定を、より確
実なものにするためには、更に、その京本と阪本との共通の親本と
思われるものを見出して、その訓点とこの両本の訓点とを相互に比
較検討してみる必要がある。

（鈴峯女子短期大学助教授）